武蔵野日曜集会

我なり
――ヨハネ伝第18章1～11節――

１９８５年２月17日（武蔵野）
小池辰雄

ゲッセマネ　霊的傲慢　かれら後退して地に倒れたり「俺を知らんと言え」神の武具　キリストが我々の武具「我なり」召団讃歌「イスラエルの旅」

【ヨハネ18・1～11】

1 此等のことを言い終えて、イエス弟子たちと偕にケデロンの小川の彼方
に出でたもう。彼処に園あり、イエス弟子等とともども入り給う。2 ここは
弟子たちと屢々あつまり給う処なれば、イエスを売るユダもこの処を知れり。
3 斯てユダは一組の兵隊と祭司長・パリサイ人等よりの下役どもとを受けて、
炬火・燈火・武器を携えて此処にきたる。4 イエス己に臨まんとする事をこ
とごとく知り、進みいでて彼らに言いたもう『誰を尋ぬるか』5 答う『ナザ
レのイエスを』イエス言いたもう『我はそれなり』イエスを売るユダも彼ら
と共に立てり。6 『我はそれなり』と言い給いし時、かれら後退して地に倒
れたり。7 爰に再び『たれを尋ぬるか』と問い給えば『ナザレのイエスを』
と言う。8 イエス答え給う『われは夫なりと既に告げたり、我を尋ぬるなら
ば此の人々の去るを容せ』9 これさきに『なんじの我に賜いし者の中より我一
人をも失わず』と言い給いし言の成就せん為なり。10 シモン・ペテロ剣をも
ちたるが、之を抜き大祭司の僕を撃ちて、その右の耳を斬り落とす、僕の名
はマルコスという。イエス、ペテロに言いたもう『剣を鞘に収めよ、11 父の
我に賜いたる酒杯は、われ飲まざらんや』

●ゲッセマネ

最後の晩餐は、ヨハネ伝でもう既に済んでいるんですが、祈りのことがずっと出てきて、それから、捕らわれのところへきたわけです。ヨハネ伝を読む前に、ちょっと共観福音書の方を少し読んでいきましょう。マタイ伝26章36節。

「36 ここにイエス彼らと共にゲッセマネという処にいたりて、弟子たちに言い
給う『わが彼処にゆきて祈る間、なんじら此処に坐せよ』37 斯てペテロとゼ
ベダイの子二人とを伴いゆき、憂い悲しみ出でて言い給う、38 『わが心いた

く憂いて死ぬばかりなり。汝ら此処に止まりて我と共に目を覚ましおれ』
39少し進みゆきて、平伏し

この「平伏し」というので、デューラーが本当に平伏している絵を書いてます。キリストが十字の形になって平伏している。十字架をキリストはもう予想していらっしゃるからね。それで十字の形に平伏した。あのデューラーの絵は素晴らしい絵です。

祈りて言い給う『わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給え。

もう御免だと、本当は。

されど我が意のままにとにはあらず、御意のままに為し給え』40弟子たちの許にきたり、その眠れるを見てペテロに言い給う『なんじら斯く一時も我と共に目を覚まし居ること能わぬか。41誘惑に陥らぬよう目を覚まし、かつ祈れ。実に心は熱すれども肉体よわきなり』42二度ゆき祈りて言い給う『わが父よ、この酒杯もし我飲までは過ぎ去りがたくば、御意のままに成し給え』43復きたりて彼らの眠れるを見たもう。是その目疲れたるなり。44また離れゆきて三たび同じ言にて祈り給う。45而して弟子たちの許に来りて言い給う『今は眠りて休め、視よ、時近づけり、人の子は罪人らの手に付さるるなり。46起きよ、我ら往くべし。視よ、我を売るもの近づけり』」

ユダのことがちゃんと分かっている。

47なお語り給うほどに、視よ、十二弟子の一人なるユダ来る、祭司長・民の長老らより遣わされたる大なる群衆、剣と棒とをもちて之に伴う。48イエスを売るもの預じめ合図を示して言う『わが接吻する者はそれなり、之を捕えよ』49かくて直ちにイエスに近づき『ラビ、安かれ』といいて接吻したれば、50イエス言いたもう『友よ、何とて来る』このとき人々すすみてイエスに手をかけて捕う。51視よ、イエスと偕にありし者のひとり手をのべ、

これはペテロのことです。

剣を抜きて、大祭司の僕をうちて、その耳を切り落せり。

このへんはずっとヨハネ伝にも出ている。

52ここにイエス彼に言い給う『なんじの剣をもとに収めよ、すべて剣をとる者は剣にて亡ぶるなり。

有名な言葉です。

53我わが父に請いて十二軍に余る御使を今あたえらるること能わずと思うか。54もし然せば斯くあるべく録したる聖書はいかで成就すべき』（マタイ26・36～54）

天軍を呼びよせて、みんなやっつけることができるんだ。けれども、そうしたらば、

「旧約の預言はどうなってくるか、イザヤ書の預言はどうするか」

ということでね。人間イエスはもちろん十字架になんかかかりたくない。けれども、この神の僕、人類を救うキリストは――「イエス」は人間の方です、「キリスト」というのは「油注がれたる神の使命者」ということ――十字架にかからざるをえない。もうあと、ルカ伝、マルコ伝は読まなくいい。大体似てますから。並行記事はマタイ伝26・36～46、マルコ伝14・32～42、ルカ伝22・39～46です。

●霊的傲慢

では、ヨハネ伝に入ります。まぁ、聖書というものは大変な書です。何度読んでも新しいですね。

1 此等のことを言い終えて、イエス弟子たちと偕にケデロンの小川の彼方に出でたもう。

「小川」とまで言わなくても、ケデロンの流れです。「ケデロン」というのは、エルサレムの東南あたりを流れていて、「暗い、暗黒」という意味です。「彼方」というのは東側です。

彼処に園あり、

「園」と言ったって、森ですね。オリーブの林です。ゲッセマネッの園です。「ゲッセマネ」というのは「油しぼり」という意味で、そこで油をしぼったようです。

イエス弟子等とともども入り給う。2 ここは弟子たちと屡々あつまり給う処なれば、

よくそこで祈られた。そのことはユダも知っている。ユダ自身も行ったから。ユダというのは優れた弟子で頭がいい。頭がよくて優れたやつは危ないんだ、ヘタすると。

イエスを売るユダもこの処を知れり。

明智光秀みたいのもそうだ。サタンがもともと優秀な優れた天使だったんだから。それが高慢になる。そして、争うわけだ。

「俺も神のごとくに」

と。高慢な霊は、霊的傲慢は一番、罪が重いんです。ヨハネ伝13章に、

「1 過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して極まで之を愛し給えり。2 夕餐のとき悪魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを売らんとする思を入れたるが、云々」（ヨハネ13・1～2）

とある。悪魔はそういう利口な野郎を利用するんだ。

だから、頭のいいやつはなかなか信仰に入れない。すぐサタン的な知恵がはたらくから。東大の生徒なんかなかなか入れない。私も東大で十何年も教えたけれども、信仰に入るやつはほとんどいない。ある程度は感心して聞いているんだよな、頭で。けれども、体で入らない。すべて、信仰の世界は体ですから。全存在ですから。パウロが言っているとおり。

パウロは頭もよかった。非常にいろんな面で優れていたが、そういったものを

「塵芥の如くに思う」

と言って捨ててかかった。そこがパウロのパウロたるところです。そうなるには、しかし、キリストにひっくり返されなければしょうがなかった。まぁ一番始末のわるいやつだったんだ、パウロというのは。ユダヤ人のもう本当に典型的なユダヤ人だった。典型的なユダヤ人がひっくり返されたんだから。それで、

「パウロは間違った」

なんて、あいかわらずユダヤ人は言っているんだから、ユダヤ人というのは頑固だよな。

3 斯てユダは一組の兵隊と祭司長・パリサイ人等よりの下役どもとを受けて、炬火（たいまつ）・燈火（ともしび）・武器を携えて此処（ここ）にきたる。

夜だからね、これ。こういう絵はたくさんあります、向うの名画に。「一組の兵隊」というのは「スペーラ」といって、「レギオン」の下にくるのが「スペーラ」なんです。「レギオン」というと、一連隊だ、六千人だ。四角い形の隊形をなしている。それの十分の一がこの「スペーラ」です。ただし、この場合は六百人もいなかったでしょうけれども。まぁ一応そういう意味です。しかし、実に大げさにやって来たんだ。

●かれら後退（あとしざり）して地に倒れたり

4 イエス己に臨まんとする事をことごとく知り、

そんなことはみんな見えている。

進みいでて彼らに言いたもう

「進みいでて」ですよ。キリストはもうちゃんと分かっているからね。隠れやしない。隠れようと思えば、キリストははっきり隠れられるから。森の中から進み出て、彼らに言い給う。

『誰を尋ぬるか』5 答う『ナザレのイエスを』イエス言いたもう『我はそれなり』

「我はそれなり」というのはギリシア語でいうと、「エゴ・エイミ」というので、「我、我なり」なんだ、直訳すると。「我こそである」「我は我なり」という言い方です。ヘブライ語でいうと、「アニー」とか、「アノキー・フー」という。日本語でいうと、「我なり」「俺だぞ」という、はっきりした強い言い方です。「俺だよ」と。しかし、この言葉はもう霊的な響きを持っている。

イエスを売るユダも彼らと共に立てり。6 『我はそれなり』と言い給いし時、かれら後退（あとしざり）して地に倒れたり。

その霊的な威力に押されて、倒れてしまった。復活のキリストが現れときも、ローマの兵隊が散り散りになった。

ダマスコ途上で、復活のキリストが天界から現れてきて、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」

と。サウロはぶっ倒された。そして三日間動けない。まぁ大変なものです、キリストが本当に力を出すと。非常に柔和な優しいひとだけれども、ひとたび力が出ると、大変なもんです。原始力を持っている。

ヨハネだってそうです。黙示録の始めの方に出ている。黙示録1章17節に、

「17 **我これを見しとき其の足下（あしもと）に倒れて死にたる者の如くなれり」（黙示録1・17）**

と。キリストが現れたでしょ、凄いキリストが。そしたら、

「これを見しとき其の足下に倒れて死にたる者の如くなれり」

と。ヨハネも黙示録でもって啓示を受ける最初にぶっ倒されたんです。本当の降参です。だから、

「本当の降参をしなければ、福音の世界には入れませんよ」

と言っているのはそのことなんだ。

「分かるの分からないのと何をぬかすか、いくらでも聖書研究会を開いてみろ、聖書の研究会で聖書がわかったらちゃんちゃらおかいしい」

というわけです。あなた方は、祈りの世界でそういう境地に自分が本当に入らないければダメだよ、いっぺん。そうしたら開かれてくるから。無教会なんて、いくら経ったってダメなわけだよな、何十年経っても。もう聖書の世界は大変な次元ですから。

「原始福音」の角度は、要するに人間の側からのただ熱意のある祈りだ。人間の熱意の祈りなんてものではないんですから、この世界は。

「エホバの熱心これをなしたもう」

ので、人の熱心ではない。パウロがひっくり返ったのがそのことなんです。パウロは熱心な人なんだ。しかし、人間の熱心ではしまいにくたびれてしまう。

「求めよ、さらば与えられん」

というのは、

「求めたら、ひっくり返されるぞ。そうしたら、与えられるぞ」

と、そこに

「ひっくり返されるぞ」

がなくてはダメなんだ。人間の求めで与えられるなら、

「それでは、求めが足りないから与えられないのか」

と、そう思うんだよ、普通はね。そうじゃないんです。壁にぶつからなかければ、ぶっ倒れなければ、電信柱にぶつかってこぶでもつくらなければ、ダメなんだよ、人間は。全く真剣勝負なんです、この福音の世界は。そのかわり、もうその世界に入ったら、これはまた楽でしょうがない。

私の「無」は悟りの無ではないんだから。賜りたる無で、十字架を冥想すれば、直ちにその世界に入れるんだ。今、自分がゴタゴタしていようが、矛盾していようが、傲慢であろうが、何であろうがいいよ。そのまま投げ入れろ。霊的変化が起きるぞと。十字架で無というが、それが無でお終いではないんだ。絶対に、無即無限無量の、即無限無量という聖霊がやって来るから。

ヨハネもパウロもみんなひっくり返された。それが、

「かれら後退(あとしざり)して地に倒れたり」

です。御霊の権威です。そして、本当にぶっ倒されて無にされると、無量なるものが来る。それが御霊の力なんです。御霊の知恵でもあり、力でもある。そしてまた、御霊の権威でもある。だから、本当に平伏しを賜っている人は本当の権威をいただいていることになる。絶対矛盾の自己同一ということ。「ゼロ＝無限大」という世界。「イコール」だよ、「イコール」は「即」の字だ。

●「俺を知らんと言え」

7爰に再び『たれを尋ぬるか』と問い給えば『ナザレのイエスを』と言う。8イエス答え給う『われは夫(それ)なりと既に告げたり、言ったじゃないかと。

我を尋ぬるならば此の人々の去るを容(ゆる)せ』

というのは、

「弟子たちをとっ捕まえるな」

と言うんです、俺だけでたくさんだと。ただ、ペテロとヨハネは従って行ったね。だから、ヨハネは見るがごとくに書いているんです。

9これさきに『なんじの我に賜いし者の中より我一人をも失わず』と言い給いし言の成就せん為なり。

ペテロはヘタすると、とっ捕まる。だから、

「俺は知らない、知らない」

とキリストを否(いな)んだ。キリストを否んだことは、もうひとつ大乗的にいうと、キリストが否ませた。

「お前を助けてやるぞ。俺を知らんと言え」

と。誰もそんなことを言わないよ。だけど、キリストの深い憐れみはそこにあった。そのかわり、先に行ったらペテロは、

「お前は本当の伝道するぞ、最後は殉教の死だ」

と、こういうわけです。もうその瞬間も、先の先までも見えているひとだね、キリストは。キリストが、

「**三度否むぞ**」

と言われた。既にそのことを聞きながら、しかも、ペテロは言わざるえないという不思議な世界ですよ。

「三度否んで、お前は捕まらないで済むよ」

ということなんだ、本当はもうひとつキリストの言葉は。ところが、ペテロというのはとにかく直情径行な男だからね。

「先生をとっ捕まえるとはけしからん」

と、瞬間的には彼は怒ってしまって、

10シモン・ペテロ剣(つるぎ)をもちたるが、之を抜き大祭司の僕を撃ちて、その右の耳を斬り落とす、僕の名はマルコスという。

名前まで分かっているんだ。耳を切り落とした。本当は真っ正面から行こうとしたんだが、耳しか切れなかった。ところが、キリストはこれを助けてやった。その耳を拾って付けてしまった。それはできるんですよ、キリストくらいのひとは。何も消毒してどうのこうのなんていりはしない。まぁ大変なひとだね。

イエス、ペテロに言いたもう『剣を鞘(さや)に収めよ、11父の我に賜いたる酒杯(さかずき)は、われ飲まざらんや』

「われ飲まざらんや」という訳はいいですね。「飲まないでいられるか」という、否定の二重なんです。

「私はそれを飲むということをしないでいいものか、しないではいられないではないか」

ということ。

●神の武具

エペソ書6章10節から、

「**10終(おわり)に言わん、汝ら主に在りて其の大能の勢威(いきおい)に頼(よ)りて強かれ。**」

これは非常に今のところと相呼応するところです。

「最後に言うけれども、お前たちは主にあって」

と。この「主にあって」はいい加減な気持で言っているのではないですよ。

「本当のキリストの中にいろ」

と。これも「の中に」の世界です。

「主にあって」

という言葉をみんな軽く使っているけれども困るよ、「主にありて」なんていう言葉を軽く使われたのでは。寝ぼけていても使う。冗談じゃない。「主にあって」と言うなら、本当に主の中にいなければ、「主にあって」なんて言ってはいけないんだ。

「主と一つになって」
ですよ。主と一如になって。私は新約聖書を訳すときには、
「主と一如になって」
とでも訳してやる。主と一つになってしまうと、「大能の勢威」が来るわけです。
「**其の大能の勢威(いきおい)に頼りて強かれ**」
と。こっちは弱くていい。弱きときに強いんです。
「**我弱きときに強し**」
とパウロも言った。そのとおり。
「ゼロなるときに無限大なり」
ということ。十字架を一体何だと思っているんだろうね。キリストはもう、
「そんなことなら、私は十字架にかからなければよかった」
と天界で言ってらっしゃるかもしれない。
「こんなことではもうしょうがない、今のキリスト教界は何だ。俺は無駄死にして
しまった」
なんて。キリストを無駄死にさせているものな、いい加減な信仰では。キリストは本当に命懸けで私たちに力を与えようとしているのに。
「その一番凄いものは要りません」
とやっているんだからね、もったいない話だよな。無条件でくださるのに。だから、本当に祈りこんでその世界に入ることです。
たまには夏にでも若い人を連れて行って、断食してそういう世界に入れてやりたいくらいに思いますよね。何も断食しなくたって入れるんだけれども。断食というのは、ただ我慢して断食するのではない。キリストを食べるために断食するんだ。キリストは、
「**我を食べ、我を飲め**」
と言われているではないか。断食の内容はそういうことだ。
キリストの絶対恩寵を受けるのも、頭で受けたってダメなんだ。全存在で受けとる。そうしたならば、キリストと一つとなれば大能の御力によって強くなる。
「11**悪魔の術(てだて)に向いて立ち得んために、神の武具をもて鎧(よろ)うべし。**
我々は悪魔と戦っているんだ。悪魔が相手をいろいろにしてやるから、その中にあるところの悪魔と戦っているので、人間と戦っているのではないんだと。
12**我らは血肉と戦うにあらず、**
はっきり書いてある。
政治・権威、
みんなこれは悪魔がやっているんだから。ソ連でもアメリカでも何でもかんでも。みんないわゆる権力者は悪魔の手下になっている。その権力が本当に善のための、悪を亡ぼすた

めの権力ならいいよ。でなくて、いろんな意味でその権力の内容がおかしくなっているからね。

この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある悪の霊と戦うなり。

パウロははっきり言ってくれている。

13この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。14汝ら立つに誠を帯として腰に結び、義を胸当として胸に当て、15平安の福音の備を靴として足に穿け。

非常におもしろい具体的な言い方をしているね。

16この他なお信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。

それだけ武装をしろと言う。武装はみんな天来の霊的な内容です。悪魔になめられてはいかんぞと。霊の戦いは、なめられてはダメですよ。いい加減にしていると、なめられるからね。

こないだ、テレビで幽霊現象をやっていたね。恐がる。恐がってはいかん。みんなあれは苦しくていろんな理由で出てくるんだから。

「どうしましたか？」

と言って聞いてやる。キリストにあると、何ものにも強いですからね。何も恐いことはない。恐いと思ったら、それはキリストにない。最高の霊ですから。自分が霊的であるとかないとか、そんなことではない。そういうことで、本当に「キリストに在る」ならばということ。「イン・クライスト」「エン・クリスト」です。

●キリストが我々の武具

17また救の冑および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。」（エペソ6・10～17）

「御霊の剣、すなわち神の言」。だから、御霊と神の言はまた一つ。霊・言。

エペソ書のこのところは非常に今日のところのいい註解になる。それで、キリストが

「我なり」

と言ったその一言は、これだけの武装が内的にあるわけです、キリストにはサタンに対して。私たちは、キリストの中に入ることが最大の武装なんだ。

「正義と平和の福音……」

なんてことを考えなくていい。パウロはそこを具体的に叙したけれども、それをひっくるめると要するに、キリストなんです。キリストが我々の武具なんです。だから、これは無手勝流です、塚原卜伝の。宮本武蔵も、両刀が一刀となり、一刀が無刀とならなければうそなんだ。剣はあれども無に等しくなる。

「鞍上人なく鞍下馬なし」

というやつです。鞍の上に人がいない。鞍の下に馬がない。そういう境地になると、馬は本当に走れるわけだ。無手勝流です。もうそれは楽でしょうがないよ。私は楽しくてしょうがないんだ、どういうわけだか。だけれども、この楽しさをくださったのは、このキリストの血を流してからだ。だから、ゲッセマネを読んでいて、私は昨日寝られなかった。

集会を休むときには私に電話をすればいい。

「先生、こういうわけで来れません」

と。何もおこりはしないよ、私は。みんなこわいのかね、私に電話をかけるのが。たまには怒鳴るかもしれない。怒鳴られようが何であろうが、それはみんな私は本当の愛をもって言っているのだからね、間違えては困るよな。いいですか、ぶつかってきなさいよ、何でも。全存在をもって真心をもって言うことは、私は決して曲解なんかしませんから。悪巧みや何か頭で計ったようなものの言い方をすると、私にはピーンと来るからね。そんなのはダメだ。

さっきマタイ伝で読んだところに、これはヨハネ黙示録にも出ているけれども、

「剣をとる者は剣で亡びる」

という。ペテロが切ったときに、キリストがそう言われた。ヨハネ伝には書いてないけれども。これはもう鉄則だものな。剣をとる者は剣で亡びる。世界の歴史をみるとみんなそうだ。アメリカもソ連も武器を、剣を鍬に変えなければダメなんだ。

相対的な自分というものを問題にすることはない。いつもこの絶対の中に自分を入れていくことです。そうすると、無手勝流も無刀流になる。

●「我なり」

それで、

「我はそれなり。我なり」

という。私たちも、「我なり」というこの権威は聖霊の権威です。それを私は無我という。本当の無我を賜った人は、「我なり」が言えるんです。無我者が「我なり」と言える。無者が「我なり」と言える。私たちはキリストによって本当に無者ですから、自分がもうないから、そうすると、即「我なり」が言える。この「我なり」が聖霊の世界だから。これは十字架・聖霊なんです。十字架・聖霊の構造が「我なり」を私たちに言わせる。だから、人を恐れることはひとつもない。「我なり」ということの内容はその時に言うべき内容なんです。なにも「我なり」なんて言う必要はないですよ。「こうである」ということがはっきり言えるのは「我なり」ということなんです。いろんな具体的なことに遭うでしょ。そして、はっきりものが言えるというのは、この「我なり」が奥にあるから言える。奥にこの「我なり」がなければ、はっきりと真理が語れない。福音が語れない。福音の告白なんだ、これは。「我なり」はキリストを告白している。これが今日の結論です。

●召団讃歌「イスラエルの旅」

それでは、私が夜中に作った讃美を歌ってみます。これは未だかつて作らなかった512番（「わがたましいの」）の譜です。

B20「イスラエルの旅」（１９８５年２月17日作　讃美歌512「わが魂の慕いまつる」）

1　イエス・キリストの　み跡したひ
はるかなるイスラエルへ
われら旅せん　旅心は
世界平和祈りつつ
ゲッセマネの森　ゴルゴタにて
あがないの愛を浴び
園の御墓より　よみがへりし
キリストに今日も会いなむ

2　ああベツレヘムよ　救主の
生まれましし星の夜よ
聖子のみ光　今日も明日も
旅路を照らし給へよ
クムラン、エリコ　サマリヤを経へ
ガリラヤ湖に出づれば
今もキリストの　み声聞こえん
山上の大告白！

3　ガリラヤのカナ　かの婚宴
招かれしマリア、イエス
饗宴のさなか　葡萄酒尽き
すべもなきにキリストは
瓶に満ちたる　水を視つめ
祈りにて酒に化す
キリストの愛は　み力あり
主の愛に今日も生きなむ